

「The Only Friend of the Lonely Monster」(全8時間)

授業者 伊藤 光

実践のポイント

この実践は、北海道教育大学と共同で制作した研究開発学校オリジナルの物語教材を使用しながら、物語の続きを朗読劇のように発表することを通して、視聴者に場面の様子をわかりやすく伝えようとする等、相手に配慮しながら英語を用いてコミュニケーションを図ることができるようにしたものです。

子供が自分たちのアイデアを生かしながら学習に取り組むことができるよう、オリジナルの物語教材に登場する主人公の願いがかなうような物語の続きをつかって発表する活動を取り入れました。

授業のねらいと展開

この授業のねらいは、主人公の願いをかなえるために、馴染みのある定型表現を活用しながら、友達と協力して物語の続きをつくり発表することができるようにすることです。これを達成できるよう、以下のような学習活動を展開しました。

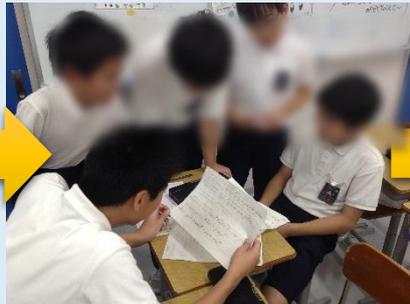
- 単元のゴールイメージと到達目標を知る。(第1時)
- オリジナルの物語を視聴し、その内容と主人公の願いを知る。(第1時)
- 個々のアイデアを生かせるグループをつくり学習計画を立てる。(第2時)
- グループの友達と協力して物語の続きの台本をつくったり、発表の練習やリハーサルをしたりする。(第3～7時)
- 発表を見合って、内容のおもしろさや発表の仕方のよさを認め合う。(第8時)

これを通して、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことに関する知識・技能や、馴染みのある語句・定型表現を使って物語をつくったり発表したりする、内容が視聴者に伝わるような発表の仕方を工夫したり内容のおもしろさを認め合ったりする等の資質・能力を育成していきます。

本実践における授業づくりのポイントの一つが、単元の開始期に、単元のゴールとなる活動の例と英語の4技能に関する CAN-DO リスト形式の単元の到達目標を具体的に示したことです。これにより、到達目標に向かう中で得られる成果や課題を子供と教師が共有しながら学習を進められるようになりました。



主人公の願いを知る



グループで物語の台本をつくる



発表のリハーサルをする

物語の続きを発表・交流

視点1：学びの文脈のある単元を構想する

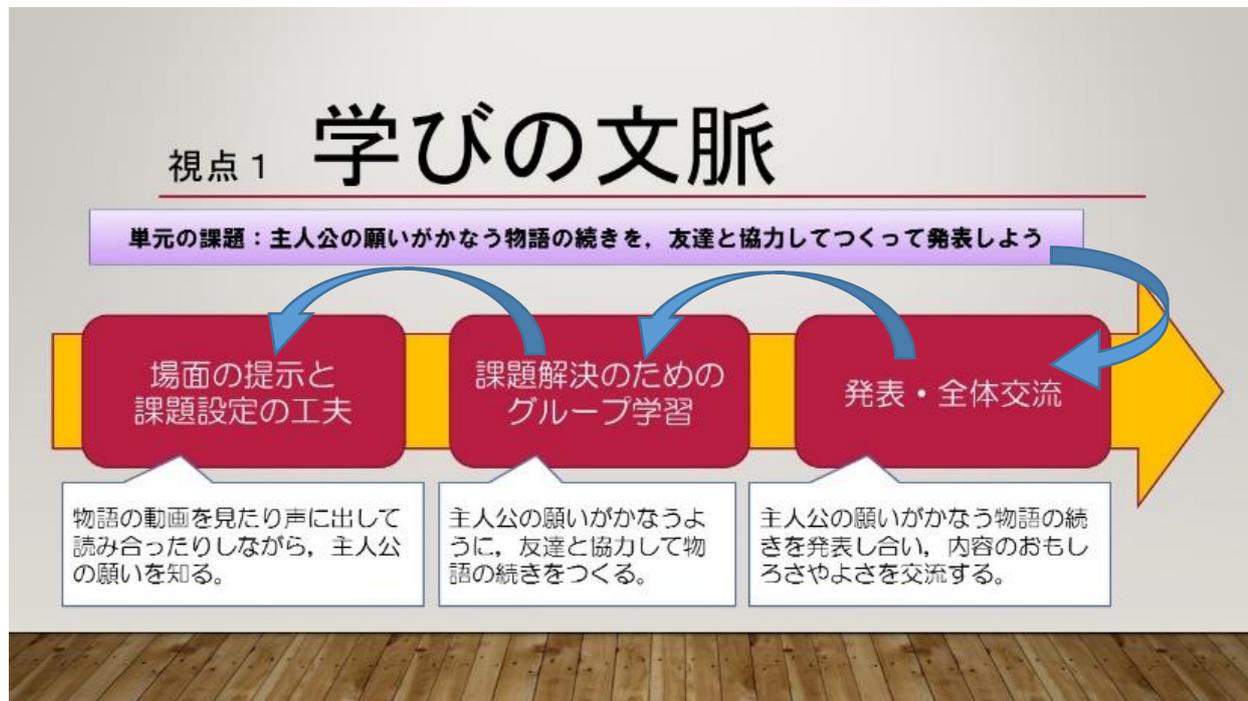


図1 本実践における「学びの文脈」のイメージ

子供が学びの連続性、必要性、関連性を自覚しながら学ぶことができるよう「学びの文脈のある単元を構想」します。さらに、その中に「必要感のある協同的な学びの設定」と「目的に応じた弾力的な振り返りの設定」を位置付けていきます。

まず、育成する資質・能力に合わせて単元の目標やゴールとなる活動を設定します。その際に「どんな場面で、誰とどう関わり、どんな言葉を使いながら、何をすることができるようにするのか」つまりコミュニケーションの目的・場面・状況等を明確にすることが大切です。本実践では、単元のゴールとなる活動を、「グループで、主人公の願いがかなう物語の続きを朗読劇のように発表する」こととし、その中で「発表内容のおもしろさや発表の仕方のよさを認め合う」こととしました。

これらを達成できるよう、単元のゴールとなる活動とそこでの子供の姿から逆追いで単元を設計します。ゴールに至るためには、十分な発表の練習の機会を設けたり、おもしろさやよさの視点を育成したりする必要があります。グループ毎の成果や課題を常に見取り、それぞれに応じた支援を行っていくことが大切になります。例えば、本実践では物語の続きの台本作りに2時間、発表練習からリハーサルまで3時間確保しました。その中で、語句・定型表現の修正を支援したり発音の仕方を指導したりしました。発表内容のおもしろさについては、グループで台本を作っている段階で、独自性や想像力豊かな展開を教師が具体的に取り上げたり、称賛の言葉をかけたりしました。また発表の仕方のよさについては、これまでの発表を伴う学習の経験を想起させたり、一つのグループで見られた工夫を全体に広めたり、他のグループの発表の練習を見に行くよう促したりしました。

発表の際に用いられる語句・定型表現も、子供にとって馴染みのあるものである必要があります。聞いたり声に出して読んだりした英語の意味内容を理解することで、そのおもしろさを味わったり、内容がよりよく伝わるよう発表の仕方を工夫したりできるからです。そのためには、オリジナルの物語の内容の大体を理解し、そこで使われている英語の語句・定型表現を音声と文字の両方を通して捉え、発表

に必要なものを選択しながら活用できるようにする必要があります。さらに子供が見通しをもって主体的に学習を進められるように、学習計画を立てる場面を設定したり、進捗状況や成果・課題を記録する学習カードを用意したりすることも大切です。

以上のような単元のゴールとなる活動とそこでの子供の姿から逆追いつくった単元の学習の展開が図1であり、1ページ目に記載した内容です。学習指導案上ではこれを単元のグランドデザインとして掲載しました。

視点2：必要感のある協同的な学び



図2 本実践における「必要感のある協同的な学び」のイメージ

他者と「考えを比べてみたい、深めてみたい、いっしょに学んでみたい」等と思える機会が必然的にあることは、アクティブ・ラーニングにおいてたいへん重要です。本実践では下の①～④を設定し、協同的な学びを展開できるようにしました。

- ① 言語や文化に関する比較により共通点や相違点を見出したり、相互補完したりする場。
- ② 自分たちにとって必要な考えや、それを伝えるためのより良い語句・定型表現を決め出す練り合いの場。
- ③ 課題解決のために必要な語句・定型表現を選択し活用しながら行う活動。(このために英語表現リストを用意しておく)
- ④ ものの見方や考え方の比較により、おもしろさ、よさ等を見出し、それらを認め合う場。

①と②は、グループづくりや物語の内容検討、台本作成の場面に位置付けました。③と④は発表の練習やリハーサル、そして発表本番に位置付けました。このようにすることで、子供は知識・技能を活用したり思考力・判断力・表現力等を働かせたり、そして学びに向かう力を発揮したりしながら協同的に学びを展開していきます。(図2)

視点3 目的に応じた弾力的な振り返り

単元の課題：主人公の願いがかなう物語の続きを、友達と協力してつくって発表しよう

4つの視点に沿った分析的な学習の振り返り
その内容の交流、振り返りカード



図3 本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」のイメージ

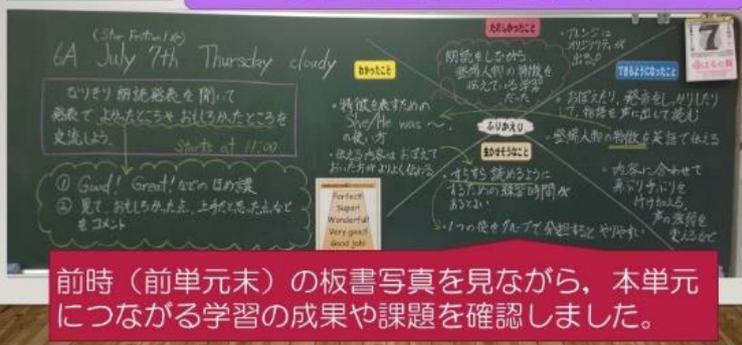
導入する学習の内容に関して、興味・関心を喚起できるような教材等を用意することに加え、既習の内容との関連が図られていると、子供は一層興味・関心を示し、動機付けられます。そして子供とともに学習の計画を立てていくことで、自主的・主体的な学習が展開されます。そこで、単元の開始期において次のような場を設定することが大切であると考えます。

- ・ 前単元もしくは既習の学習内容とそれらの成果・課題を想起する場。
- ・ 単元の CAN・DO リスト（英語の4技能に関する到達目標）の内容を踏まえながら、これまでの学習経験を基に学習の計画を立て、見通しをもつ場。

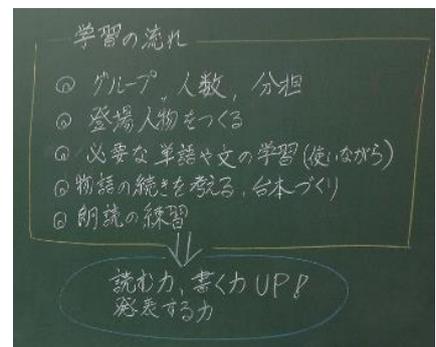
授業記録 1時間目① 前単元の学習の振り返り

7月11日(月)

目的に応じた弾力的な振り返り



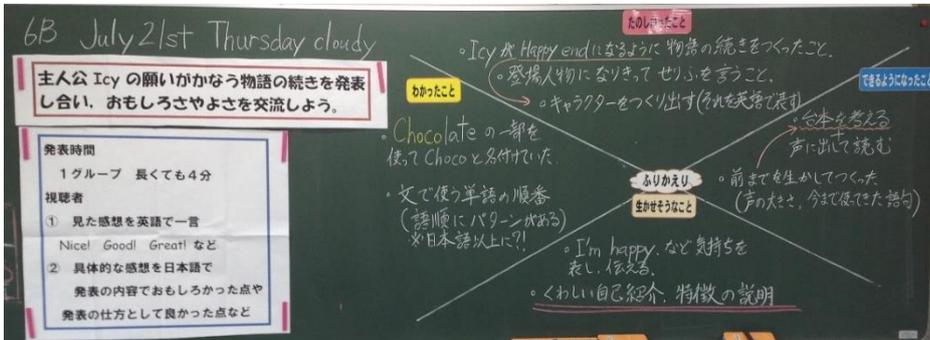
前単元の振り返り板書の提示



学習計画を立てる場の設定

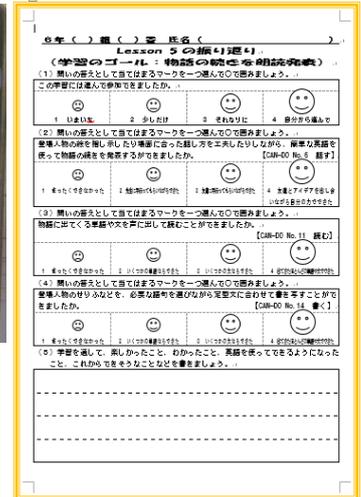
また、学習の成果や課題を自覚化したり共有したりすることで、次の学びが一層深まりのあるものになると考えます。そのためには、図3にあるように、振り返り内容を具体的に述べるよう促したり、それに適切な価値付けの言葉をかけたり、Xチャート等を用いて黑板上で可視化し共有できるようにしたりしながら、振り返りの場を設定する必要があると考えます。具体的には次のようになります。

- 楽しかったこと・わかったこと・できるようになったこと・生かせそうなこと等の視点に沿った振り返りを行う場。
- 振り返り内容を交流し、学習の成果を共有、実感したり、自分や友達の学びのよさを認め合ったりする場。
- その時間の成果や課題に基づいて次時の学習計画を立てたり修正したりする場。
- CAN-DO チェック形式と振り返りの視点に沿った自由記述形式による振り返りカードを使って学習の振り返りを明示的に行いながら、資質・能力の高まりを実感する場。



上写真：Xチャートで表した学習の振り返り内容

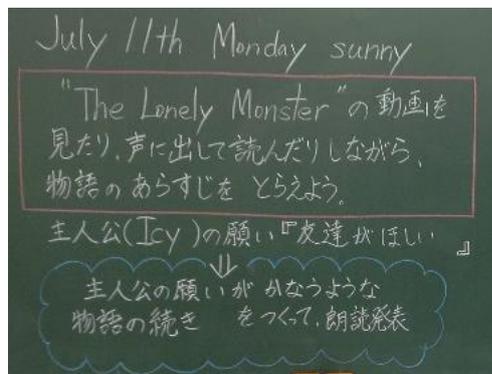
右写真：CAN-DO チェック形式と自由記述形式による振り返りカード



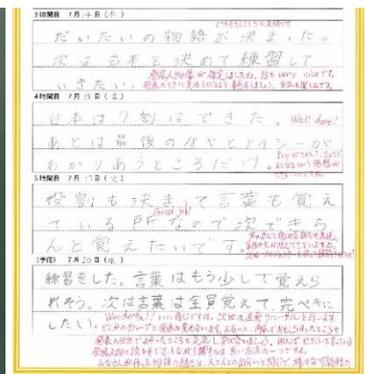
授業者からのコメント

○ 単元のゴールイメージの明確化は子供の主体的な学習につながる

本実践では、授業づくりの最初の段階から単元のゴールイメージを明確化したことで、それに基づいて指導事項や学習内容を精選することができました。子供もゴールイメージに向かう学習計画を立てて学習の見通しをもち、課題解決のために主体的な学習を進めることができました。



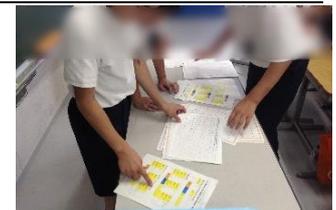
単元のゴールイメージの明確化



グループ学習カード

○ 個と集団の見取りに基づく指導・支援が協同的な学びを支える

本実践では、単元のほとんどの時間でグループによる学習活動を展開しました。協同的な学びを促すために重要となるのが学習中の行動観察、ワークシートの使用状況等、教師による個と集団の見取りでした。行動観察や学習カードを通して、それぞれどのような支援を必要としているかを把握したり、グループ内外で比較させたいアイデアを押し



グループで物語の続きのアイデアを交流したり英語表現リストから語句・定型表現を選択したりする様子

さえたりしながら、個や集団に対する指導・支援を具体的に決め出すことができました。

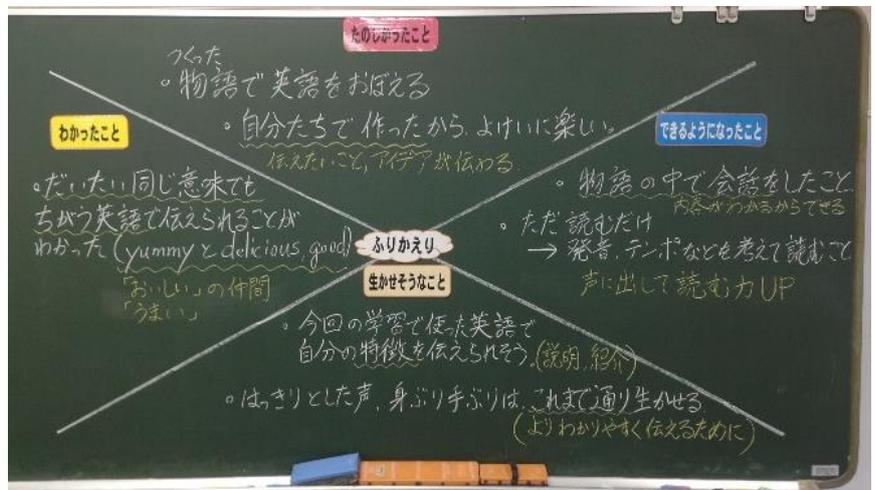
なお、本実践では子供たちが物語の続きのアイデアを基に7つのグループ(単元の目標や内容を鑑み、1グループ4~6人とするよう指示した)をつくりましたが、それぞれのグループの見取りと指導・支援は概ね以下の通りでした。

グループ	見取り	指導・支援
G1	個々が想像力豊かな新しい登場人物に関するアイデアを持っており、それらを少しずつ取り入れれば主人公の願いがかなう物語の続きをつくれるグループであった。	個々のアイデアにあるおもしろさを具体的に取り上げ、それらを発表で用いる際の必須の語句・定型表現を教える等、適度な指導・支援により見通しをもつことができ、学習が円滑に進んだ。発表の仕方に関しては、物おじせず堂々とできる子供がそろっていたので、これまでの学習で発表を行った際に工夫してきた方法を想起するよう促した。声の大きさが十分である他、内容に合わせた大胆なイントネーションは、他のグループにとって参考になった。
G2 G3	主人公の願いをかなえるための新しい登場人物を創り出そうとしていたが、当初は遊び心が強いものとなった。	再度主人公の願いを確認させ、それをかなえるための展開を再考するよう、つまり課題と正対するよう促した。さらに他のグループや過年度の例を示したり、自分たちのアイデアに近い物語の続きの展開を選択させたりする等、手厚い指導・支援により見通しをもつことができ、その後の学習が円滑に進んだ。発表の仕方に関してはグループ5・6・7を参考に促した。
G4	特定の子供のリーダーシップが強く発揮されているとともに、メンバー同士で協調する姿も見られ、物語の続きの展開に関しても考えが固まっていた。	台本を作っていく際に必要としている語句・定型表現を教えていく等、メンバーの疑問や要望にその都度教師が即時対応していくのが効果的であった。発表の仕方に関しては、登場人物への思い入れも強く、それらのセリフの内容に合わせてイントネーションや声色を工夫しようとしていた。さらに工夫をこらすことができるよう、グループ1の発表の仕方を参考に促した。
G5	物語の続きのアイデアとしては一人一人近いものをもっていたが、グループづくりの際の人数調整で困難を抱えた。	一人一人の性格や人間関係を鑑みた配慮の言葉がけや支援としての解決方法の提示をしたところ、その後の学習では十分な見通しをもって主体的かつ協同的に学習を進めていた。発表の内容をわかりやすく伝えるための視点をもてるよう、発表の仕方に関してはグループ6・7を参考に促した。
G6 G7	主体性を発揮できる子供が複数集まっており、進んで個々のアイデアを比較したりより良いものを選び出したりしながら十分な見通しをもって主体的かつ協同的に学習を進めていた。	意図する内容を英語で発表できるよう、伝えたい内容に最も近いものを馴染みのある語句・定型表現から選ぶ際に助言をしたり、それらだけでは表現しきれないところ限って新たな表現を教えたりした。発表の仕方に関しては、新たな登場人物の説明時には、その絵を手で指示したり、登場人物のセリフに応じて立ち位置を合わせたりする等、他のグループが参考にできる工夫をしていた。

個と集団の見取りに基づく指導・支援により、子供たちは友達同士で関わりながら多様なものの見方や考え方に触れつつ、課題解決に向けて協同的に学習を進めていくことができました。

○ 学習の成果の実感や学びのよさの認め合いが学びに向かう力を養う

今年度は昨年度の振り返りの視点である「楽しかったこと」「わかったこと」「できるようになったこと」に加え、「生かせそうなこと」を新たに設けました。これは昨年度までに子供たちが発表した感想で教師が意図的に取り上げてきたもの、すなわち「学習したことが、今後の学習で、または将来どんなことに役立ちそうか」に基づき設定した視点です。振り返りの視点として



Xチャートで表した学習の振り返り内容とそこから見出せる成果等

「生かせそうなこと」を明確に設けたことにより、英語の4技能を活用できる場面や、学習で行った活動を応用できそうな実生活の場面等、さらなる学びの可能性について意識的に見出そうとするようになりました。

研究大会の公開授業の事後討議において、振り返りの際、振り返りカードが先か全体交流が先かという話題になりましたが、結果的に子供が学習の成果を実感したり自分や友達の学びのよさを認め合ったりできればよいと考えます。したがって順番については子供の発達段階や学級の実態に応じて決めていけばよいと、今は考えています。なお、公開学級の場合は、感想や考えをたくさん出し合ってから、総括としての振り返りをカードに書く方が、記述内容の質が良くなる傾向がありました。これは、自分の考えだけでなく、友達の考えから学んだことも加えて記述するといった経験、自分たちの学びを認め合いながら、自分の学びの成果を実感していく経験を積み重ねてきたことによるものだと考えています。

● 単元の内容を若干簡略化する必要がある

本実践では、6時間扱いを予定していたところ、2時間上乗せし8時間扱いとしました。年間35時間のうち4分の1弱の時間を費やしていることになりました。他の単元に必要な時間とのバランスを考えると、単元の内容の簡略化が必要になりそうです。例えば、物語の続きの台本を作る際は、展開のパターンはほぼそのままにしつつ、語句や定型表現をつくりたい内容に合わせて、右のような「英語表現リスト」の中から選択する方法が考えられます。この場合でも、子

<p>1. 手の部分、持っている(身に付けている)ものを表す語句。</p> <table border="1"> <tr> <td>eyes</td><td>目</td><td>arms</td><td>腕</td><td>hands</td><td>手</td> </tr> <tr> <td>mouth</td><td>口</td><td>head</td><td>頭</td><td>ears</td><td>耳</td> </tr> <tr> <td>roompick on my head</td><td>私の頭を叩く</td><td>straw on my head</td><td>私の頭を刺す</td><td>attack on my head</td><td>私の頭を打つ</td> </tr> <tr> <td>saucepan</td><td>鍋</td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>		eyes	目	arms	腕	hands	手	mouth	口	head	頭	ears	耳	roompick on my head	私の頭を叩く	straw on my head	私の頭を刺す	attack on my head	私の頭を打つ	saucepan	鍋					<p>2. 色を表す語句。</p> <table border="1"> <tr> <td>white</td><td>白</td><td>brown</td><td>茶色</td><td>white and brown</td><td>白と茶色</td> </tr> <tr> <td>pink</td><td>桃色</td><td>blue</td><td>青</td><td>light blue</td><td>水色</td> </tr> <tr> <td>yellow</td><td>黄色</td><td>green</td><td>緑</td><td>black</td><td>黒</td> </tr> <tr> <td>dark brown</td><td>濃い茶色</td><td>young leaves color</td><td>若葉色</td><td></td><td></td> </tr> </table>		white	白	brown	茶色	white and brown	白と茶色	pink	桃色	blue	青	light blue	水色	yellow	黄色	green	緑	black	黒	dark brown	濃い茶色	young leaves color	若葉色		
eyes	目	arms	腕	hands	手																																														
mouth	口	head	頭	ears	耳																																														
roompick on my head	私の頭を叩く	straw on my head	私の頭を刺す	attack on my head	私の頭を打つ																																														
saucepan	鍋																																																		
white	白	brown	茶色	white and brown	白と茶色																																														
pink	桃色	blue	青	light blue	水色																																														
yellow	黄色	green	緑	black	黒																																														
dark brown	濃い茶色	young leaves color	若葉色																																																
<p>3. 食べ物や飲み物の種類を表す語句。</p> <table border="1"> <tr> <td>hot</td><td>熱い</td><td>very hot</td><td>とても熱い</td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>cold</td><td>冷たい</td><td>very cold</td><td>とても冷たい</td><td>frozen</td><td>凍った、冷凍の</td> </tr> <tr> <td></td><td></td><td>I'm</td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>		hot	熱い	very hot	とても熱い			cold	冷たい	very cold	とても冷たい	frozen	凍った、冷凍の			I'm				<p>4. 動物の種類を表す語句。</p> <table border="1"> <tr> <td>ice</td><td>氷</td><td>melting ice</td><td>とけかかっている氷</td> </tr> <tr> <td>shaved ice</td><td>かき氷</td><td>syrup</td><td>シロップ</td> </tr> <tr> <td>green tea (matcha)</td><td>抹茶</td><td>a meatball</td><td>ミートボール</td> </tr> <tr> <td>bean-jam bun</td><td>豆あんパン</td><td>tofu, fish, and so on</td><td>豆腐、魚、など</td> </tr> <tr> <td>very hot chocolate</td><td>とても熱いココア</td><td>a terrine</td><td>テリーヌ</td> </tr> <tr> <td>a takoyaki</td><td>たこ焼き</td><td></td><td></td> </tr> </table>		ice	氷	melting ice	とけかかっている氷	shaved ice	かき氷	syrup	シロップ	green tea (matcha)	抹茶	a meatball	ミートボール	bean-jam bun	豆あんパン	tofu, fish, and so on	豆腐、魚、など	very hot chocolate	とても熱いココア	a terrine	テリーヌ	a takoyaki	たこ焼き								
hot	熱い	very hot	とても熱い																																																
cold	冷たい	very cold	とても冷たい	frozen	凍った、冷凍の																																														
		I'm																																																	
ice	氷	melting ice	とけかかっている氷																																																
shaved ice	かき氷	syrup	シロップ																																																
green tea (matcha)	抹茶	a meatball	ミートボール																																																
bean-jam bun	豆あんパン	tofu, fish, and so on	豆腐、魚、など																																																
very hot chocolate	とても熱いココア	a terrine	テリーヌ																																																
a takoyaki	たこ焼き																																																		
<p>5. 状態を表す語句。</p> <table border="1"> <tr> <td>It has frozen..</td><td>凍ったよ。</td> </tr> <tr> <td>It hasn't frozen..</td><td>凍らなかったよ。</td> </tr> <tr> <td>This is yummy. / This is good..</td><td>これはおいしい! / これはいい!</td> </tr> <tr> <td>Great! / Wonderful!</td><td>すごい!</td> </tr> <tr> <td>We're good friends!</td><td>ぼくたちはいい友達だね。</td> </tr> <tr> <td>Thank you..</td><td>ありがとう。</td> </tr> </table>		It has frozen..	凍ったよ。	It hasn't frozen..	凍らなかったよ。	This is yummy. / This is good..	これはおいしい! / これはいい!	Great! / Wonderful!	すごい!	We're good friends!	ぼくたちはいい友達だね。	Thank you..	ありがとう。	<p>6. その他。</p> <table border="1"> <tr> <td>I'm</td><td></td> </tr> </table>		I'm																																			
It has frozen..	凍ったよ。																																																		
It hasn't frozen..	凍らなかったよ。																																																		
This is yummy. / This is good..	これはおいしい! / これはいい!																																																		
Great! / Wonderful!	すごい!																																																		
We're good friends!	ぼくたちはいい友達だね。																																																		
Thank you..	ありがとう。																																																		
I'm																																																			

グループ毎のアイデアに応じて用意した台本作成用英語表現リスト

供の思い，アイデアを生かすことができるようにしたいものです。例えば，ストーリーの展開のパターンや使われている文の形は同じでも，使用する語句を変えることで内容が変わるおもしろさに着目させ，語句・定型表現の選び方によって意図する物語の続きの展開をある程度表現することができることに気付かせることが大切になると考えます。

● 協同的な学びに合う学習形態も大切である

本実践では，物語をつくったり発表の練習やりハーサルをしたりしているときはグループで集まって学習していましたが，つくった物語の発表を見合う場面でもグループで集まるよう促すことを失念しました。発表場面でもグループで集まっていることにより，発表を見ているときに，英語の理解度に応じてわかった内容を補完し合ったり，発表者たちに感想をコメントする際の英語のほめ言葉を決め出したり，内容でおもしろかったところや発表の仕方でよかったところをより吟味することができたと考えます。協同的な学びを展開している場合，それに合う学習形態を意図的に設定していることも大切であることを改めて認識しました。

● 学びのよさを認め合うほめ言葉を使うことに慣れる必要がある

自分以外にも友達の学びのよさを見出し，それをシンプルな言葉で率直に伝え合うことは，学びのよさの認め合いにつながります。小学校英語科でこれを実現できるようにする表現が，ほめ言葉の類です。さらに，学びのどこが，何が良かったのかを，日本語でもよいので具体的に伝えることは，互いに学びの成果を実感することにつながると同時に，ほめ言葉を使いながらコミュニケーションを図る文化を学ぶことにもなります。子供たちには，機会あるごとに右のリストにあるようなほめ言葉を使うよう促してきました。



掲示している英語のほめ言葉例

本実践では，子供たちは各グループの発表を見終わったとき，思い付きで Good! や Great! などとコメントしているのではなく，発表を見た結果に応じてほめ言葉リストから言葉を選んで使おうとしていました。発表が終

わった時の教師による“Your comments, please.”に対して，子供たちから例えば“Good!”が出る一方で「いや，“Very good!”じゃない？」といったつぶやきがあったのは象徴的です。そのようにつぶやいた子供は，以前見た発表よりも内容や発表の仕方が改善されている部分を見出したり，自分たちのグループにはなかった内容のおもしろさや発表の仕方のよさを見出したりしていたと思われます。ほめ言葉の後のコメントにあった，「登場人物がどんなキャラクターなのか，手で指し示しながら説明するように発表していた」や「ものすごく熱かったのが，Icy に触ってもらったことで，ちょうどよい温度になったという話がおもしろい」等はその典型例であると考えます。

しかし一方で，どの言葉を選んだらよいか迷いが生じたり，ほめ言葉を伝えること自体に十分に慣れていなかったりした子供がいたことも事実です。ほめ言葉を積極的に使い，よさを具体的に伝え合う場面をもっと多く設定してきていけばよかったです。ほめ言葉を使って伝え合えることは素晴らしいことではありますが，それをできるようにするためには，様々な単元を通して，ほめ言葉を使う機会を繰り返し設けていく必要があります。そしてほめ言葉とともに，何が良かったのかを具体的にコメントする経験を豊富にさせていく必要もありそうです。これらにより，英語を通して多様な見方や考え方を認め合う態度が醸成されていくと考えます。